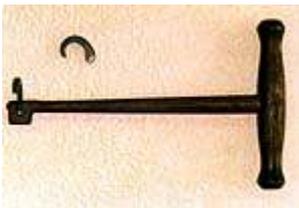


第12回 特別企画展**歯科医療のあゆみ 医療としての抜歯器具の変遷****日本における抜歯器具の変遷****柘植家の抜歯鉗子**

1808年頃の抜歯鉗子には、日本と交易のあった諸外国から渡来したものや、日本独自のものも使用されていたようで、「鉗」、「歯鋏」、「歯抜」と呼ばれる鉗子があります。この抜歯鉗子は、三重県松阪市の柘植家に伝わるもので、同時代のものと思われます。

**臂鉤（ひこう）**

浅尾藩蒔田家の御典医、杉生方策が、1859年に著書「内服同功」の中で、木製の臂鉤という抜歯器具を図説しています。この構造と使用方法から推察すると、西洋に見られた Tooth key に相当する器具と考えられます。この展示物は復元したものです。

**槽柄・木槌（そうえ・きづち）**

華岡青洲の弟子、本間玄調が1847年に著書「瘍科秘録」の中で図説した抜歯器具です。槽柄は木製で、その先端に槽という丸い凹があります。一人がこの槽の部分に歯頸部に当て、もう一人が反対の端を木槌で叩き、二人がかりで歯を脱臼させて、抜歯したようです。この展示物は復元したものです。

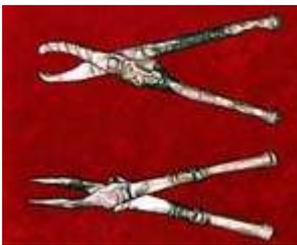
外国における抜歯器具の変遷

古代



オドンタグラ

ギリシャ時代の抜歯鉗子で長さは64mmにすぎません。この展示物は実物大の複製で、実際に顎模型上で抜歯を試みると、鉗子全体が口腔内に入り、臼歯部の歯冠も把持することができます。



リザグラ&フォーフェックス

古代ローマ時代の抜歯鉗子で、ケルズス(紀元前30～紀元50年頃)の著書のなかで、当時の医師達が使った外科器具として記述されています。また残根を抜くための特殊な抜歯鉗子とも記述されています。この展示物は、ほぼ実物大の複製です。



ダントサンカ

古代インドの抜歯鉗子で、外科医バクバータが収集した古代インド医学書を参考に考案したもの。抜歯を目的とした特殊な鉗子で、動物の頭に似た形をしており、4番目の鉗子には「ネコ」、5番目の鉗子には、「ジャッカル」という名称がつけられています。この展示物は資料を元に復元したものです。

中世



ペリカン

ギィ・ド・ショウリアク(1300～1368)が、樽作りの道具をヒントに発明したもの。嘴が内部に曲がり、胴状の広い丸みがあり、歯に当てると支えとなる支柱の形状が上嘴と喉袋に類似していることから、ペリカンという名称がつけられました。



トウス・キー(歯鍵)

アレキサンダー・モンローが、1742年に著書「Medical Essay and Observation」のなかで、最初に紹介しました。ドアの鍵に似た形状をし、まっすぐな柄と大きな輪をしたハンドルが付き、鍵の先端はヒンジで締められた「鍵爪」と一緒に「押板」が付いていました。